

論文要旨

【目的】 我が国における脳卒中生活者を対象とした QOL 測定尺度は少なく妥当性・信頼性の優れた尺度は見当たらない。本研究は、Neuro-QoL・Short-Form（以下 Neuro-QoL・SF）の翻訳行い、日本語版 Neuro-QoL・SF を作成し表面的妥当性の検討を行った。

【方法】 Neuro-QoL・SF の 12 下位尺度のうち翻訳許可の得られた 3 つの下位尺度（Sleep disturbance, Stigma, Emotional and Behavioral Dyscontrol）を原版元の翻訳過程（FACIT と ISPOR）に従い、順翻訳・調整・逆翻訳の段階を経て日本語版 Neuro-QoL・SF（案）を作成した。その後、脳卒中生活者に日本語版 Neuro-QoL・SF（案）への回答とインタビューを実施し、表面的妥当性の検討を行い、日本語版 Neuro-QoL・SF（完成版）を完成させた。

【結果】 Neuro-QoL・SF の 3 下位尺度について計 24 尺度項目を作成し、日本語版 Neuro-QoL・SF（案）とした。翻訳において「オノマトペ」を使用することによって、日本人の読み手に理解しやすくし、直訳するだけでは理解し難い内容を臨床における患者ならではの日本語表現を用いることで、より理解しやすい日本語版の尺度項目にした。

日本語版 Neuro-QoL・SF（案）への回答とインタビューの対象者数は計 9 名であった。うち 5 名は脳梗塞、残り 4 名は脳出血が起因疾患であり、発症後平均 8.22 ± 4.76 年であった。現存症状は左右半身麻痺、構音障害、高次脳機能障害、自律神経障害など多様であった。インタビュー結果をもとにスーパーバイザーと日本語版 Neuro-QoL・SF（案）の精練し、下位尺度の説明文冒頭に「他者に尋ねることなく、あなたが感じたことを答えてください」の文章を掲載、計 24 尺度項目から成る日本語版 Neuro-QoL・SF 完成版を作成した。

【考察】 日本や読み手の文化に即した翻訳を実施したこと、日本人脳卒中生活者に対する尺度項目インタビュー調査を取り入れたことで、日本語版 Neuro-QoL・SF に対する表面的妥当性をより高めることができた。我が国の脳卒中生活者が日本語版 Neuro-QoL・SF を回答する際は、尺度項目が主観を問うための抽象的表現であるがゆえに回答を困難にしていることや、脳卒中生活者のセルフスティグマ、原版作成国のアメリカと日本の文化的特性が影響していると考えられた。それらも踏まえ下位尺度の説明文冒頭に主観での回答を促す文章を加えたことで、対象者の回答時の戸惑いを小さくできると考えた。

【結論】 翻訳した 3 下位尺度の日本語版 Neuro-QoL・SF の表面的妥当性を高めることができた。